

酪農育英会だより

2013年12月1日発行 2013年版 公益財団法人酪農育英会刊 ●題字／原田 勇

「希望も理想もない人生」はつまらない…

公益財団法人酪農育英会理事長 仙北 富志和



酪農学園の創立者黒澤酉蔵翁は、戦後わが国の産業、経済が混迷・疲弊する姿を目の当たりにして、その再生、復興は「一にも二にも人である」として、青年の奮起に期待した。それは自らの青年期の

苦学体験と困難を極めた酪農民の組織化運動から導かれたものだ。

酉蔵翁は晩年、三健論を提唱して「心・身・財」が一体となった健康の大切さを説いている。「財」とは家計経済のことである。「いかに向学心に燃えても、経済的な理由がブロックになっては願いがかなえられない」。そこには農村に埋もれている青年への強い思いがあった。

酉蔵翁は、自らの私財を提供し、その熱意に呼応した関係会社や団体の協力も得て発足したのが酪農育英会である。奨学金の貸与は1958年度から開始され、同年開校した三愛女子高校生が最初の対象者になった。2012年度までの貸与総額は、7億1876万円余に達し、事業内容もアジアを中心とした私費留学生やとわの森三愛高校生への給付、若手研究者への研究奨励金の交付、日本酪農青年研究連盟の活動支援（育英金授与）などへと広がっている。

財団法人であった酪農育英会は、2008年12月に新しい公益法人制度が施行されたことに対応して、公益財団法人としての認可を得るべく準備を進めた結果、2013年4月1日から「公益財団法人」として新たにスタートした。

練達は希望を生む

酪農学園80年の歩みを見ると、酉蔵翁の「私の人生で酪農学園ほど苦労したものはない。北海道に適した寒地農業を成功させるためには、これを担う青年を教育するほかに道はない、と考えてやり通した」との回顧が心に迫る。

聖書、ローマの信徒への手紙の一節「艱難は忍耐

を、忍耐は練達を、練達は希望を生み出す。そしてその希望は失望に終ることはない」は、酉蔵翁がよく用いた聖句である。「希望も理想もない人生ほどつまらないものはないよ、君達」「これからは君達の時代だ」は、酉蔵翁が絶えず学生に発した激励であった。

私は、酉蔵翁の「希望」と題する訓を座右の銘として大切にし、しばしば引用してきた。「希望は生命である。希望にかがやく国家、集団、青年をみるとその張りきった姿、疲れを知らぬ精進ぶりに神神しささえ感ずるのである。希望のない人生は生けるしかばねであって、あわれなる存在である。…」。

さて聖句を今一度反芻したい。いささか不謹慎だが「風が吹けば桶屋が儲かる」の喩えのように「艱難（苦難）」から「希望」が導かれている。ならば「今、自分ほど辛い思いをしている者はない」と強く意識すれば希望がかなえられる、と教えているのだろうか。

希望の実現は

否、苦難から希望が導かれる過程には、「忍耐と練達」のハードルがあると聖書は教えている。苦難に耐え忍ぶ努力があって熟達（練達）の境地に達する。ここまできてどうにか希望の光が見える、というわけである。長い人生を振り返って、「希望が満たされた」の境地に達するには、たゆまぬ努力の積み重ねが必要だ、ということになる。

「希望のつくり方」(岩波新書)の著者玄田有史(東大社会科学研究所教授)氏は「希望は変化を求めている人が必要とするものだ」として、「希望は与えられるものではない。自分たちの手で見つけるものだ」と論じている。玄田氏の解説によれば、希望は、気持ちを高める、求めるものを定める、段取りを考える、行動を起こす、の四つの柱からなるとしている。

前途洋々たる青年諸君には、酉蔵翁の「希望は清く、高く、地についたものでなければならぬ」の教えをかみしめてほしい。



研究奨励金をいただいて

酪農学園大学獣医学群獣医学類
食品衛生学ユニット 講師 白井 優

私は2012年 5月より酪農学園大学獣医学群獣医学類食品衛生学ユニットにて講師として働かせていただいております。

このたび、2012年度の研究奨励金の対象としていただき、誠にありがとうございました。着任して間もないこともあり、研究資金が少ないなか、研究の推進に大きな助けとなりました。大変感謝しております。

私は大学卒業後、農林水産省動物医薬品検査所や農林水産省の本省において勤務しておりました。動物医薬品検査所では動物用ワクチンの国家検定や安全性に関する研究、動物由来薬剤耐性菌に関する研究を行っておりました。動物由来薬剤耐性菌の研究の中には現在でも研究対象としている**Clostridium difficile* (クロストリジウム デイフィシル) (以降、*C.difficile*) も含まれています。

農林水産省での仕事にも魅力を感じてはいたのですが、より深く掘り下げた研究を行いたいという思いもあり、縁あって2012年より酪農学園大学に着任することになりました。その

中で、農林水産省時代から扱っている*C.difficile*についても研究を続けておりますので、研究の目的と合わせて昨年の成果をここで示させていただきます。ありがとうございます。

研究の目的

人の抗菌薬関連下痢症や偽膜性腸炎の原因菌である*C.difficile*は、牛や豚等の食用動物に分布しています。近年、海外では人の感染と豚肉の摂食との関係が特に注目され、WHOは豚における分布状況の調査が必要と指摘しています。

一方、日本国内でも、*C.difficile*を原因とする抗菌薬関連下痢症、偽膜性腸炎が発生しており死亡例も報告されているのですが、豚における保菌状況は不明のままです。海外の報告では、若齢豚における分離率が成豚に比べて高いことがわかってきています。

そこで、日本での保菌状況および人への病原性を明らかにすることを目的として若齢豚の糞便からの分離試験を実施しました。

試験内容

全国12の豚農場から1農場当た

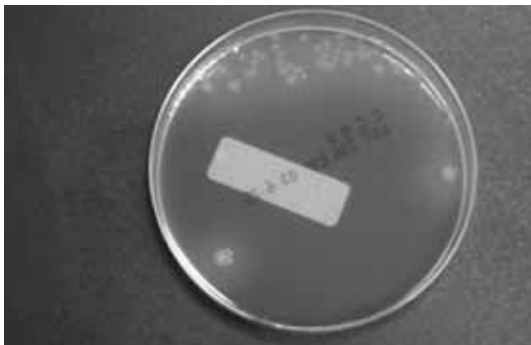
り10頭の若齢豚(1-21日齢)の糞便を集めてサンプル(合計120サンプル)とし、サンプルを芽胞選択(エタノールショック)処理後、分離用培地を用いて嫌気培養を行い分離しました。分離後の同定は、グラム染色およびPCR法により行い、日本の若齢豚における分離率を算出しました。また、人への病原性を調べるためにトキシンAおよびトキシンBの保有状況をPCR法で明らかにしました。

結果および今後の取り組み

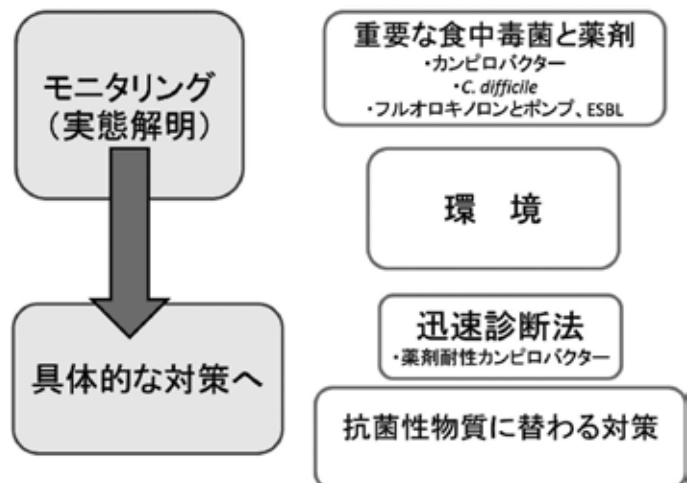
64% (77/120) のサンプルから111株の*C.difficile*が分離されました。このうち、62.2% (69/111) の株がトキシンAおよびトキシンBを保有していました。スロベニアおよびアメリカでの報告では、若齢豚における*C.difficile*の陽性率は、それぞれ50.9%および50.0%であり、今回の結果は海外での報告に比べて若干高い傾向を示しました。

また、人への病原性との関連がある*トキシンAおよび*トキシンBを高率に保有 (62.2%) していたことから、豚から人の食中毒の原因菌として今後も注意が必要であることが示唆されました。

今後、今回分離された株を用いて人由来株や市販豚肉由来株との比較を行うことで、若齢豚に広く蔓延することが明らかになったトキシン



分離培地上のdifficileのコロニー性状



を産生する*C.difficile*の食品におけるリスクについて明らかにしていくことを予定しております。

現在、私が所属するユニットでは、動物由来薬剤耐性菌の現状解明から、その対策につながる研究を行っております。今回、紹介させていただいたのは、中でも現状解明の研究の一部です。

今後は、現状解明だけでなく具体的な対策となるような研究成果をあげられるよう頑張っていこうと考えているところです。

Clostridium difficile (C.difficile) は、食中毒菌の一つとして知られるクロストリジウム属の1種です。C.difficileは大腸に常在している菌(常在菌)の一種で、その多くは毒素を産生しません。

しかし、この菌は多くの抗生物質が効かない(耐性)菌であるため、ヒトが病気になった際に抗生物質の投与を受けると、腸内の他の菌が死滅し、増殖(菌交代現象)をし、毒素を産生する株が優勢になることがあります。産生する毒素(トキシシン)が腸管粘膜に障害を起こし、軽症では軟便、重症では激しい下痢、腹痛、高熱を伴う、偽膜性大腸炎を発症します。



獣医学貢献のために尽力

酪農学園大学大学院獣医学研究科
獣医学専攻博士課程 傅 大 任
フ ダ レン

私は台湾から4年前より来日した傅大任(フダレン)と申します。本学大学院の獣医学研究科、獣医臨床腫瘍研究室で廉澤教授に指導を受けており、研究生として1年過ごしたのち、2011年4月に博士課程に進学し、2年半が経過しました。

日本での留学を希望した動機については、近年、人医療と同様に獣医療領域においても悪性腫瘍の伴侶動物が増加しています。また、これは伴侶動物の主要な死亡原因となっています。一方で、これに係わる獣医師の役割も大きく、獣医師の臨床経験や専門知識は腫瘍罹患動物のQOL(生活の質)を左右します。

日本の大学は数多くの腫瘍症例が集まり、臨床と研究が両立できています。さらに、酪農学園大学はその分野における臨床・研究ともに優秀な獣医臨床学の発展に貢献すべく、最新の獣医学を取り入れているため、本学に留学しました。

台湾においては、放射線治療の動物への応用が試みはじめられた

ばかりなので、その専門的知識や経験は不十分です。そこで、日本においても研究の必要が求められている「悪性腫瘍の放射線感受性の評価とその増感に関する研究」を私の大学院での研究分野とすることで、台湾獣医学の発展にとどまらず、日本の獣医学にも貢献したいと思っています。

このたびは、酪農育英会奨学生に採用していただき、誠にありがとうございます。私は長男ですが、経済状況に関しては、2年前に父が定年退職し、弟がアメリカに留学したため、授業料や生活費などが家計を圧迫していました。

また、アルバイトによって生活費を補うには時間的余裕がない状況でした。このような状況のなかで奨学金をいただいたことで、両親の負担を減らすことができたのと同時に、生活上の問題を解決し、自分の研究に更に集中でき、生活に不安を抱くことなく有意義に過ごせることになり、心より感謝申し上げます。

第65回日本酪農研究会(経営コンクール) 酪農育英金を授与

日本酪農青年研究連盟主催の酪農経営コンクールが、全国の青年酪農家約250名の参加の下、2013年11月13日仙台市で開催された。最優秀賞(黒澤杯)には、福岡連盟の木庭健一さん、優秀賞には釧路地方連盟の乗田優一郎さんが選ばれた(審査員安宅一夫酪農学園大学名誉教授ほか)。木庭さんは、地域資源を有効に活用した高い収益の実現、乗田さんは家族による草地型酪農への取組みが高く評価された。ご兩人には更なる研鑽を期待

して酪農育英金(20・10万円)が授与された。



左より永田後援会常務、仙北育英会理事長、最優秀賞の木庭さん、安宅酪農学園大学名誉教授(審査員)

2012年度の事業報告及び2013年度の事業計画

2012年度事業報告

1 奨学金貸与事業：43名に対し、総額19,200,000円を貸与した。

内訳	予算		決算		差異	
	人数	(千円)	人数	(千円)	人数	(千円)
大 学	41	19,320	39	17,880	2	1,440
大 学 院	2	1,200	1	600	1	600
高 等 学 校	4	960	3	720	1	240
計	47	21,480	43	19,200	4	2,280

2 奨学金給与事業：25名に対し、総額5,880,000円を給与した。

内訳	予算		決算		差異	
	人数	(千円)	人数	(千円)	人数	(千円)
私 費 大 学	3	1,440	1	240	2	1,200
留 学 生 大 学 院	4	2,400	7	3,600	△3	△1,200
高 等 学 校	17	2,040	17	2,040	0	0
邦 人 留 学 生	1	480	0	0	1	480
計	25	6,360	25	5,880	0	480

3 酪農研究奨励金交付事業：

- 1 個人に対し300,000円を交付した。(予算300,000円)
- 1 団体に対し300,000円を交付した。(予算300,000円)

- ・酪農学園内の40歳未満の教職員1名に対し交付した。
獣医学群獣医学類 白井 優 講師 300,000円
『若齢豚におけるClostridium difficileの保菌状態と公衆衛生に対する影響』
- ・日本酪農青年研究連盟に対し、日本酪農研究会における最優秀賞(黒澤賞)などの副賞として交付した。 300,000円
最優秀賞：高橋まり子(兵庫)
「地域と共生できる酪農経営モデルを目指して」
優 秀 賞：重富康則(福岡)
「一歩・一歩」(従事する酪農経営について)

2013年度事業計画書

1 奨学金貸与事業：41名に対し、総額18,720,000円を貸与する。

内訳	予算		予算(前年)		増減	
	人数	(千円)	人数	(千円)	人数	(千円)
大 学	34	16,320	41	19,320	△7	△3,000
大 学 院	2	1,200	2	1,200	0	0
高 等 学 校	5	1,200	4	960	1	240
計	41	18,720	47	21,480	△6	△2,760

2 奨学金給与事業：24名に対し、総額6,660,000円を給与する。

内訳	予算		予算(前年)		増減	
	人数	(千円)	人数	(千円)	人数	(千円)
私 費 大 学	1	480	3	1,440	△2	△960
留 学 生 大 学 院	7	3,900	4	2,400	3	1,500
高 等 学 校	15	1,800	17	2,040	△2	△240
邦 人 留 学 生	1	480	1	480	0	0
計	24	6,660	25	6,360	△1	300

3 酪農研究奨励金交付事業：

- 1 個人に対し300,000円を交付する。
- 1 団体に対し300,000円を交付する。

- ・日本酪農青年研究連盟 第63回日本酪農研究会における最優秀賞(黒澤賞)などの副賞(酪農育英金)として交付する。 300,000円
- ・酪農学園内の40歳未満の教職員1名に対し交付する。 300,000円

今後のご寄付についてのお願い

酪農育英会は2013(平成25)年4月に、公益財団法人として認定を受けました。

これを受けまして、酪農育英会としてはますます育英事業の拡大発展を図っていきたく思っております。しかし、事業を拡大するためには資金に余裕がなく、現状を維持して行くのが精一杯のところであります。

今までは「酪農学園後援会(特定公益増進法人)」を経由して寄付をいただいた方に対し、「後援会」からの領収証明で所得控除が受けられましたが、今後は「育英会」に直接寄付をいただき、その領収書で所得控除が受けられることと

なりました。その内容は、
[(寄付金額(注1)ー2,000円)を所得金額から控除]

(注1) 所得金額の40%を限度とします
となっております。

「育英会」としまして、今後積極的に寄付をお願いする活動を進めてまいりますので、ぜひ御協力のほどお願い申し上げます。

なお、「所得控除」ではなく、「税額控除」の方法もありますが、「育英会」が、この方法を受けられるためには、下記のいずれかの大きな条件をクリアしなければなりません。

1. 一人3,000円以上の寄付を頂ける人を恒常的に100人以上確保すること。

2. 経常収入金額に占める寄付金収入の割合が20%以上で、かつ恒常にあること。

参考：[(寄付金額ー2,000円)×40%(注2)を所得税額から控除]

(注2) 所得税額の25%を限度とします

もちろんこれらをクリアするために努力を進めてまいります。そのためにも皆様方の絶大なるご支援ご協力をお願いする次第であります。

酪農育英会だより
2013年12月1日発行 2013年版
公益財団法人酪農育英会
〒069-8501 江別市文京台緑町582
TEL 011-386-1211
E-mail: rg-ikuei@rakuno.ac.jp
印刷 北海道リハビリ